J. ジェイコブズが教えてくれたもの

東京大学大学院工学系研究科教授 **西村　幸夫**（にしむら ゆきお）

ジェーン・ジェイコブズが亡くなった翌日の2006年4月26日、ニューヨークタイムズ紙は2,800語に及ぶ長文の追悼記事を掲載している。その中でダグラス・マーチン記者はジェイコブズの若いころの興味深い逸話を紹介している。彼女は若いころお使いにやらされた時など、トーマス・ジェファーソンと空想の会話を楽しむ習慣があったという。こちらからしゃべる内容がなくなったとき、会話の相手をベンジャミン・フランクリンに変えて、同様の空想の議論を続けたという。

この逸話は単にジェイコブズの空想癖を示唆しているのではない。ここから知り得るのは彼女が様々な事象を独力で考え抜き、それを他人に伝える力を養ったということである。

ジェイコブズは都市計画の専門教育を受けているわけではなかった。建築家でもなければ経済学者でもなかった。しかし、彼女の著書はアメリカのみならず世界の都市計画家や経済学者に深い影響を与えた。それはなぜか。彼女の思考が現実の観察に依拠し、現実の都市の状況から自力で思想を深め、かつ説得力のある言葉でそれを語っていったからである。

なまじ都市計画の専門教育を受けている人間だと、都市の目指すべきものはなどと問われると、安全性や快適性など、どこか教科書に書かれていたようなお題目を何の疑問もなく並べてしまいがちである。

しかし、よく現実を目を凝らして見てみると、こうしたお題目が現実の街路においてどのようなアクティビティとして実現しているかが見えてくる。抽象的な用語ではなく、生活の実感から生まれる概念として、ジェイコブズは自分が観察した生きた都市の特長を、多様性 diversity という簡潔な一言で言い切ったのである。

生き生きとしたソーシャルライフが実現している様子を自分の目で見、自分の肉体で実感するところから彼女の都市論は出発している。多様なソーシャルライフが実現しているところに、抽象的な快適性や安全性の論議がすべて集約されてしまうといった事実のつかみ方が卓抜なのだ。

それはおそらくジェファーソンと空想の議論を楽しんできた少女時代から培ってきた彼女の自律思考のたまものなのだろう。

専門家であるならば受けた教育の中であまりにも自明なものとして突き詰めることのなかった事実に対して、ジェイコブズは徹底した観察と思考によって、これを簡潔で明瞭、かつ分かりやすいことばで提示し得たのである。

さらに注目すべきなのは、多様性を担保するための有名な四つの公理、すなわち、①複数の機能を有する地区や通り、②小さめの街区、③建築年代や用途などが多様な建物の集合、④高密度居住、がいずれも具体的な空間的イメージを持って語られていることである。彼女は多様性を担保するための手段として、社会制度や規制のあり方をいうわけでもなく、文化論や経済論をぶちあげるわけでもない。

あるいはこうした「高邁」な議論を展開した方が大向こうの受けはいいかもしれない。いかにもインテリのような印象を与えることもできよう。

しかし、ジェイコブズはそのような路線とは無縁である。ニューヨークの街路生活を子細に観察した成果をもとに、同様に細かな空間的配慮として指摘するというスタイルを一貫してとっているのである。小振りの街区が望ましいといった公理は、普段なにげなく街路を歩いてしまっていたのでは決して実感できない感懐だろう。

都市のフィジカルなプランニングやデザインに携わるものとして、私はジェイコブズが示してくれた空間的なしつらえや実感から豊かな都市生活の広がりを把握していくというアプローチにこだわっていいのだということ、むしろこだわるべきなのだということを教わった。背中を押されたといってもいい。

もう一つ重要な点は、ジェイコブズの視点は街路が整備されているかや美しいかではなく、その街路が生きているか、すなわち賑わいがあるかという点だったということである。

そしてそのことは、街路の善し悪しを決めるのは建築家や都市デザイナーではなく、そこに住んでいる住民たちなのだということを意味している。コミュニティの目から都市を見るのである。

この当たり前の事実は、しかしながら、革命的な意義を持っている。都市の空間はその意味ではすでに居住者によって生きられることによって選別され、評価されているのだ。それは決して専門家の価値判断ではない。

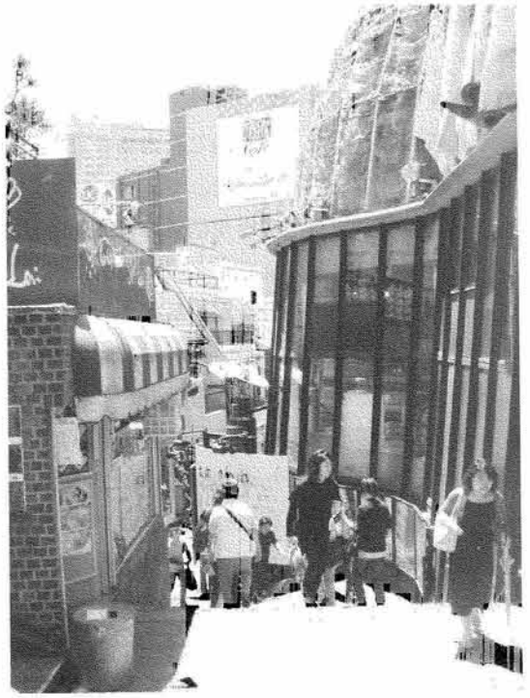
もちろんこうしたことを論じた書物や思想家はこれまでにも少なくなかった。ジェイコブズが偉大だったのは、この事実を生活者の自律的な思考で、単純明快な力強い文章によって簡明に示した点にある。それは彼女自身が建築家や都市デザイナーではなく、一人の都市生活者だったからである。臆することなく一人の都市生活者としての素直な視点から都市や街路を見たからこそ、説得力を持った議論が生まれたのだ。

そしてなによりも嬉しいのは、この著書『アメリカ大都市の死と生』（1961）がアーバンリニューアルに沸き返っていたはずの当時のアメリカでさえ、非常に重要な著書として賞賛をもって受け入れられ、実際に大きな影響力を持ったということである。

それは、環境問題に関するレイチェル・カーソンの問題提起の書『沈黙の春』（1962）や都市の規範に関するクリストファー・アレグザンダーの『パタン・ランゲージ』（1977）などが出版されたときと同じような「大事件」だったのだろう。

今日的な視点からジェイコブズの遺産を考えると、フィジカル・プランナー／デザイナーとしての私の立場からすると以下のような点が重要だと思える。

第一に、地域コミュニティの再評価が次第になされるようになってきた日本の現実を勘案すると、これを単なる合意形成に係わる手法論として扱うのではなく、また、ひとづくりなどのソフト政策への予算措置などにとどまることなく、ジェイコブズが行ったように空間の問題として論じる視点を確立する必要がある。



東京・渋谷のスペイン坂風景。一見乱雑だが、確かにこの坂には生きた魅力を創り出している多様性があるといえる。近代的な都市計画が介入するとこうした魅力はこの坂からは消えてしまうだろう。

日本において表面にあらわれる指標が「多様性」になるかどうかは必ずしも定かではないが、賑わいや活力といった空間に表象されている都市の現実が都市の「生」を表すという確乎とした信念が必要である。都市の規制緩和をめぐる都市計画家と経済学者の不毛な論争を乗り越えるためにも、ジェイコブズが喝破したような生活者からの揺るぎない視点が構築される必要がある。

何が生きている都市を決める要因なのかは、住み手であればおのずと分かっているものなのだ。それをいかに表現し、説得力のある形で施策へ反映させることができるか否かが問われることになる。

第二に、現在の日本でおこりつつある町家再生や路地の見直し、田園回帰など、これまでの都市計画の論理ではなかなか対処できなかった事象を都市計画の大きな流れの中で正しく位置づけて、今後の展望を描き出すためにも、ジェイコブズが持ち続けていた生活者からの視点をもう一度振り返り、21世紀の新しい文脈の中で再評価する必要が高まってきているという点である。20世紀の常識を今一度疑ってかからなければならない。そんなことをジェイコブズはすでに1960年代にやってのけていたのである。

専門家が陥りがちな視野の狭い隘路を回避し、素朴であるけれども本質を突いた思考の発露を支え、深堀りし、新しい価値の体系を構築するような試みがいまの私たちには必要だといえる。

例えば、路地の問題はこれまで防災上欠陥のある狭隘道路の問題として語られてきた。その事実は踏まえるとしても、路地を活かす実験が各地で少なからず行われているという現実や、昭和レトロのブームが路地裏を一つのキーワードにしているという現象の背景を考えると、そこには新しい日本型の都市の「生」の物語が潜んでいるという予感がするのは私だけではないはずだ。

日本流のジェイコブズ論者が登場し、こうした現象を住み手の心を揺さぶる言葉で解明し、平明な対処策を指し示してくれることが待たれる。旗手はおそらくは都市や経済の専門家ではなく、たとえ空想上であれ、トーマス・ジェファーソンと掘り下げた会話のできるような偉大な都市生活者が担うことになるのではなかろうか。もちろん都市や経済の専門家も同時に偉大な生活者であり得るが。

いずれにしても『アメリカ大都市の死と生』や『パタン・ランゲージ』などのように論理の射程距離が群を抜いて長い思考は既成の社会体制側の論者から出てくることは期待できないだろう。

しかし同時に、都市計画の制度においても生活者の日々の息づかいが重視されるような計画プロセスの改訂や規制制度自体の分権化などが進められなければならない。時代を読んだ少数者の意見も尊重しなければならない。こうした変革を担わなければならないのはいわゆる専門家としての私たちだという自覚は持っているつもりである。

また第三に、アメリカの文脈に沿って見るならば、ニューアーバニストと呼ばれる現代アメリカにおける都市デザイナーたちによるジェイコブズの再評価が進んでいる点が注目される。ニューアーバニズムはある意味でジェイコブズ主義の再来であるということができる。21世紀前半のアメリカにおいてこうしたアクティビティを重視した復古的な住宅地計画の人気が定着するとすれば、行政評価のあり方や都市経営のシステムなど、多様な側面においてジェイコブズ主義の復興が見られるかもしれない。

ジェイコブズは1993年に復刊された『アメリカ大都市の死と生』のモダン・ライブラリー版に新しい緒言を寄せているが、その中で自分の仕事を自然生態学からのアナロジーで「都市生態学 city ecology」と呼んでいる。

確かに再生のための多様性重視や長期にわたる有機的発展、そのことによるキャリング・キャパシティの増大、微細な諸要素の尊重など両者には多くの類似する視点がある。——都市を操作可能な空間の集積とみなすのではなく、「生き物たち」の集積とみなすことからジェイコブズの仕事は始まっているのだ。こうしたまなざしは常に一貫している。

ジェイコブズは晩年の著書『市場の倫理 統治の倫理』(1992) において、誠意を持った取り引きの成立し得る社会のベースに市場の倫理があると主張している。そして市場の倫理を以下のようないくつものアフォリズムで表現している。

「市場の倫理：暴力を閉め出せ/自発的に合意せよ/正直たれ/他人や外国人とも気やすく協力せよ/競争せよ/契約尊重/創意工夫の発揮/新奇・発明を取り入れよ/効率を高めよ/快適と便利さの向上/目的のために異説を唱えよ/生産的目的に投資せよ/勤勉なれ/節倹たれ」

一方で、統治の倫理を対置させ、次のような表現でその特質を描いている。

「統治の倫理：取引を避けよ／勇敢であれ／規律遵守／伝統堅持／位階尊重／忠実たれ／復讐せよ／目的のためには欺け／余暇を豊かに使え／見栄を張れ／気前よく施せ／排他的であれ／剛毅たれ／運命甘受／名誉を尊べ」

行政の論理は、ジェイコブズによると、統治の倫理のもとにある。二つの倫理体系をどのような空間構成のもとで選択しつつ、私たちの行動規範を構築していったらいいのか。——背負いきれないほどの難問ではあるが、ここには都市とその計画を論ずる際の深い示唆があるように思える。

こうした警句に読者は30年前の『アメリカ大都市の死と生』にみられたような徹底した都市へのこだわりと、都市生活者の視点が見いだせないと感じるかもしれない。ジェイコブズの関心は経済システムに移っているからである。しかし確実なのは、彼女が主張する経済の倫理には心がある。生活者の姿があるのだ。こうした経済の倫理のもとで生活者側から見た都市空間の再生がなされていくことを夢想すると、私たちが共有する現代日本の都市システムも少しずつではあるとしても良い方向に向かっていくように思える。